

鑑真和上座像

この鑑真の像は、日本最古の肖像彫刻であり、奈良時代（710～794）に盛んだった脱活乾漆造の代表例です。この像は鑑真の没年 763 年に完成したと推定され、鑑真の弟子の一人忍基がこの像の制作を指導したとされています。

脱活乾漆造では、漆を塗った麻布の層を粘土に貼り付ける工程があります。像の調査により、鑑真の像に使用されている麻の素材は実際に使用された衣類からのものであることが明らかになりました。僧侶の衣は麻の織物で作られる傾向があり、鑑真自身の服が像に着せられているという可能性につながります。

この国宝の色は鮮やかなままであり、日本に渡航するのに 12 年間で 6 回の挑戦をし、様々な困難に直面した鑑真の不屈の精神を巧妙に表現しています。困難の中で鑑真は失明しており、像の目が閉じているのはこのためかもしれません。肖像彫刻のジャンルではこのように目を閉じたものは珍しいです。

鑑真は、天皇からも篤く称賛されました。19 世紀半ばに開山堂で火災が発生したとき、弟子たちは、像を守るために命をかけました。

像は年に 3 日だけ公開されるが、2013 年に完成した複製は、御影堂の南西にある開山堂で見ることができます。